

幼児集団における「けんか」についての一考察

菅沼和恵
(城西幼稚園)

I 研究目的

幼児にとって「けんか」は、現象的には自己主張の結果生じるものであり、又「けんか」を通して他の存在を意識し、相手にも考えがあることを学んでいく、即ち人間として発達途上にある幼児にとって「けんか」は自己中心性より脱却し社会化へ向う過程で「自我の成熟」のために不可欠なものであるといえよう。

さて『「自我意識」について ジェームズ(William James, 1842~1910)(註1)は、物質我(material self)と社会我(social self)、精神我(spiritual self)をあげているが、物質我のはじまりとして身体我(bodily self)を加えることができる。

身体我とは、自分の身体を自分のものと感じる事であり、物質我は「これは自分の物」と外界の事物に自我意識が結びついたものである。また社会我は社会生活を通して自分の地位や役割を理解する事から発達する。精神我は主体と客体が分化し、自分の価値観や理想に従って自分の行動や周囲の人々の行動を評価し批判する事が出来るようになる。精神我が発達すると、子どもは大人に対する依存から独立していくと中田カヨ子は述べている。(註2)

「けんか」についての先行研究は1972~1985の保育学会論文中「けんか」のタイトルでは見当たらないのである。「保育研究」-けんかを通して考える-の中で、平井信義は「仲間関係の基盤」から、八木紘一郎は、「表現活動の基盤」から「けんかのすすめ」を述べている。(註3)

そこで今回はジェームズの「自我意識論」に基づき「幼児集団におけるけんか」の様相を明らかにすることを目的とする。

II 方法

- 1)対象児 東京都・横浜市内の幼稚園児
- 2)調査期間 1986年6月8日~1986年6月21日
- 3)調査方法 学生の協力により、保育中に発生したけんかを自然観察法により記録する(1学生3件)短期大学保育科学生 91名
- 4)調査数 3歳児……34件、4歳児……79件、5歳児……95件、異年齢児……38件、計246件(期間中のけんかが3件に至らなかったものと重複資料4件、計-27)

III 調査結果

調査資料を筆者が年齢別、項目に分け集計したものが下記の通りである。

1) けんかの原因(しかける側の動機) <表1>

項目	3歳児 34	4歳児 79	5歳児 95	異年齢児 38
物質我	24 71%	28 36%	27 29%	20 53%
身体 物質	9	6	4	3
社会我	10 29%	50 63%	65 68%	17 44%
精神我		1 1%	3 3%	1 3%

<表2>

社会我の内訳	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢児
仲間に入れたい	3	11	10	4
いやがらせ・嘲笑・おす	1	8	7	4
場のよこどり(遊び)	4	1	5	1
ルール違反		7	9	1
座席をめぐる(000階)	2	6	11	
意見のくいちがい		2	6	
ふざけから本気に		6	5	1
誤解(思いちがい)		2	1	2
役割をめぐる			5	
破壊		4	4	2
その他(アクシデント原因不明)		3	2	2

2) 発生場所 <表3>

項目	3歳児 34	4歳児 79	5歳児 95	異年齢児 38
保育室	22 64%	37 47%	42 44%	8 20%
ホール	1 2%	5 6%	13 14%	4 10%
廊下	1 2%	6 8%	3 3%	
水道口		3 4%	1 1%	1 3%
砂場	4 14%	6 8%	5 5%	6 16%
固定遊具	3 9%	9 11%	5 5%	2 5%
その他	園庭 3 9%	13 16%	24 26%	17 45%
屋内			2 2%	

3) 発生場所と原因(上位3~4位) <表4>

	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢児
①保育室	①物質 ①身体 場よこどり 座席	①物質 ふざけ 座席 いやがらせ	①物質 座席 仲間 いやがらせ	①園庭 身体 いやがらせ 価値観
②砂場	②身体 物質	②園庭 物質 いやがらせ	②ホール 場よこどり 仲間 いやがらせ	②保育室 物質 いやがらせ 仲間
③園庭	③物質 仲間	③園庭 仲間 物質 いやがらせ	③園庭 物質 ルール 意見くいちがい	③砂場 物質 仲間 破壊
④園庭	④園庭 身体 仲間	④園庭 固定遊具 ルール		

4) しかけられた側の反応(手段)

<表5>

項目	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢児
身体をぶつかる	13 38%	17 21%	19 20%	10 26%
泣く	6 18%	19 24%	13 14%	5 13%
身体・泣く	1 3%	4 5%	3 3%	1 3%
口でいう	9 26%	29 36%	47 50%	14 36%
言いながら泣く	3 9%	2 3%	5 5%	1 3%
にらむ		3 4%	1 1%	1 3%
物を取り合い、投げ	1 3%	2 3%	1 1%	3 8%
だま		1 1%	4 4%	
追う	1 3%	2 3%	2 2%	1 3%
その他				2 5%

5) 対象

<表6>

対象	3歳児34	4歳児79	5歳児95	異年齢児38
1:1	23 69%	55 70%	52 55%	16 42%
I:1(1)	6 18%	7 9%	16 17%	5 14%
I:1(2-5)	4 12%	14 17%	4 4%	1 2%
複:1	1 1%	3 4%	15 16%	13 34%
複:複			8 8%	3 8%

<表7>

対象内訳	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢	加:複	5歳児	異年齢児
複:1(2:1)	1	2	4	4	複:複(2:2)	2	
(3:1)		1	5	4	(2:3)		1(5歳・4歳)
4:1				1	(2:6)		1(5:4)
1:2			2	1	(3:2)	2	1(5:4)
1:3			4	3	(3:3)	4	

6) いやがらせの対象及び反応

<表8>

加:被	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢児
1:1	1 泣	7 泣2 口5	5 身3 泣1 口1	3 4歳:5歳に 泣1 5歳:4歳に 泣1 5歳:4歳に 口1
3:1		1 泣	1 泣	
1:3			1 口	
3:2				1 5歳:4歳泣

IV 考察

1) けんかの原因について

① 物質我...3歳児、異年齢児では半数以上を占め、各年齢とも高い。これは幼児期のけんかの特徴のひとつとみることができる。

② 社会我...4歳児では50%、5歳児では60%と、年齢に比例して高くなっている。これは集団生活を通し、仲間との関わりの中で社会我が育ちつつあることを示すものと考えられる。

③ 精神我...4~5歳児であられ始めている。これは自分のもっている価値観を言葉で相手に伝えることができる時期に精神我が芽生え始めるといえる。

2) 社会我の内訳

① 仲間にいれない...各年齢とも高く、幼児集団では、この原因でのトラブルの多いことを示す。

② 席とり...3歳児では保育者、5歳児では仲間

の隣の席をめぐるの争いで、集団の中での依存の対象の違いがわかる。

③ ルール違反...4~5歳児で、この原因のけんかが目立ってくる。集団生活にも慣れて、仲間との遊びも活発になるこの時期に、ルールを無視し自分勝手事に対してのぶつかり合いから生じるものである。対等の立場で主張することができることの表われであろう。

④ いやがらせ...各年齢でいやがらせがみられる。4歳児では2位であり、「泣くかどうかためしてみよう」「泣け泣け」と、はやしたてて泣かせているのが2件あった。「いじめ」の萌芽とならぬよう善処したい。

3) 発生場所と原因

① 保育室...どの年齢でも高い。生活の場としての保育室の中で摩擦が多いことを示している。原因として物をめぐっての争いが高い。しかし4~5歳児では内容的に社会我の原因が多くなってきている。

4) しかけられた側の反応

低年齢児の場合、相手に対等にぶつかる時は身体で反応し、かなわない時には防衛手段として泣く。口で言う事が多いのは、言葉の発達と相俟っての現象であるとみられる。

5) 対象

① 幼児のけんかは、1対1の個のぶつかり合いから始まる。<表6>における「1:1(1)」の(1)内の数は、けんか当事者以外の遊び仲間の人数である。グループで遊んでいても、けんかは1対1というのが興味深い。

② 「複数:1」「複数:複数」など、けんかの複数化は、4~5歳児へと増加している。その人数は2~3人の場合が多い。幼児は個と個の争いから、個対グループ、そしてグループ対グループと、年齢と共に変化しているのがみられる。

V 結論

以上のように「けんか」を通して自我意識が物質我から社会我へ、そして精神我へいく様相をみることができる。集団内でのけんかが、幼児の自我の成熟の糧となるよう生かしたい。なお、けんかのない集団では幼児の自我意識はどこで育つのだろうか。我々は幼児の自我の成長の場となる集団が育つことを願い、そのための努力をしていきたいものである。

註1. Willam James...アメリカの心理学者、哲学者、思想家。

註2. 保育研究 1981, 2-1 相川書房 P.50

註3. P.24, P.32